

一九四五（昭和二〇）年八月一日、日本のポツダム宣言受諾、連合国への無条件降伏により、ながきにわたる戦争に終止符がうたれた。同年三月と五月の東京大空襲により東京が灰燼に帰すなかで、国士館もB29爆撃機



鮎澤 巖

国士館を支えた人々

鮎澤 巖

浪江 健雄



による空襲を受け、教職員や学生・生徒の必死の消火活動にもかかわらず、校舎のほとんどを焼失し、戦災を免れたのは、大講堂と柔道場、剣道場と正気・時習寮のみであった。それでも、わずかに焼け残った大講堂や剣道場などを教場として、同年一〇月頃より徐々に授業を再開していった。しかし、教育現場では、国士館教育の根幹でもあった武道教育が、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の意を体した文部省により禁止されるなど、それまで国士館が築いてきた文武両道による教育方針の変更をせまられることとなった。

この時期アメリカは、戦争責任の多くは教育にあったとしてGHQを通じて、日本の国家主義的教育を民主的教育に改める基本方針を示した。その中には、軍国主義を支えた教育指導者などを解職するという、公職追放の嵐が教育界にも巻き起こっていた。

また、教育民主化の影響は、校名や寄附行為にもおよび、一九四五年二月二〇日、文部省の要請により、法人名改称と寄附行為改正を申請し、国士館の名称を「至徳学園」に改称した。そして同日には、CIE（民間情報教育局）局長代理ニューゼント、青年部長ダーギンなどの立会いのもと、大講堂内に学生・生徒を集めて国士館専門学校校長交代式が執り行われた。この時、柴田徳次郎に代わって校長となったのが鮎澤巖^{いわ}である。柴田には、翌四六年三月、公職追放が適用されており、それに先立っての人事であった。校長となった鮎澤は、この後三年半、戦後の混乱した難局を自身の卓越した語学力をもって、GHQの意向を正確に読み取って学園を守り、教育の改革期に至徳学園を牽引したのである。

鮎澤巖は、一八九四（明治二七）年一〇月一日、現常陸太田市で、元水戸藩士の父宗平、母タケの次男として生まれた。男子三人兄弟である。長兄が東京の商船学校へ入学したのを機に一家で上京し、芝に住む。一二歳であった。そこで芝中学に進学した（福本和子「鮎澤巖先生について―戦後のご活躍のかけに―」『鮎澤巖先生記念誌』鮎澤巖先生記念誌編集世話人、一九九八年。以下、鮎澤の略歴については、同論文及び「鮎澤巖先生略年表」を参照）。そして、その同学年に柴田徳次郎がい

たのである。二人は友人となった。

また、この頃鮎澤は、安部磯雄（日本社会主義運動の先駆者）のユニテリアン教会に足を運んでいた。そこで彼の心をうごかしたのが、安部が主宰していたキリスト教的人道主義を唱う「社会主義研究会」であった。その社会改良の思想が、後に社会立法に取り組み、ILO（国際労働機関）に関わる契機となった。

一九一一（明治四四）年、芝中学を卒業した鮎澤は、「日米平和奨学会」の奨学生に選ばれ、渡米する。その頃、アメリカカリフォルニア州で日本人排斥運動が起こり、次第に全米に広がった。これは、日本からアメリカへの移民が、一八九〇年代から増加し、年平均一万人以上にのぼるようになったことに一因がある。この状況を憂えたキリスト教伝道指導者セオドル・リチャズは、両国の理解を深めるために、日本の青年をアメリカへ留学させる運動を起こし、「日米平和奨学会」を設けた。日本側では、大隈重信を代表として、当時、第一高等学校の校長であった新渡戸稲造ら教育者が奨学生の選考委員会を作った。

選考は論文によってなされ、鮎澤はその論文において、日米の関係を過去の歴史から説きおこし、太平洋を挟んだ両国が友好関係を保つことにおいてのみ世界平和が保

たれると結論している（前掲福本論文）。そして最終的には五名が選ばれ、中学をでたばかりの鮎澤は、最年少であった。

奨学生となった鮎澤は、ハワイの中央太平洋学院（ハイスクール）からホイットマンカレッジを経て、一九一五（大正四）年、クウェーカー（キリスト友会）のハバフォード大学へ入学する。鮎澤の談では「そこで私は、ワットソンという有名な社会学の先生から講義を聞き、以前から抱いていた社会奉仕に身をささげようという考えを再び起こした」（『わが心の日記』『毎日新聞』一九六六年八月一四日）という。

次いで一九一七（大正六）年、コロンビア大学大学院に進学した鮎澤は、ニューヨークの大学セツルメントで働き、自らの生活費を稼ぐとともに、ニューヨークの貧民街で慈善事業の手助けをする活動にも参加していた。そこで、現社会に潜む社会悪について考えさせられ、「結局、根本的に社会の組織変えを必要とするということに落ち着いた。十二、三才のころ、東京芝のユニテリアン教会の中で安部磯雄あたりから吹き込まれた社会改良の思想は、ようやくこのころになってはつきりした形をとりはじめていた。そして社会立法と取り組み、博士論文にも国際労働立法論を選んだ」（前掲「わが心の日記」）。

こうしたなか、ついには、Phi Beta Kappa という全米の大学で優等生にのみ与えられる榮譽を得て、コロンビア大学初の法文系における日本人博士（Ph.D.）となった。この頃になると、日本でもようやく労働問題が頭をもたげはじめていた。それ以前は、国際間の問題は国と国との交渉であつたが、その中に労働者が代表として参加するようになり、ILO が国際連盟の一部としてできた。そして一九二〇（大正九）年、鮎澤の願いがかなうかたちでILO 帝国代表ジュネーブ事務所に勤務することになったのである。

一九二三（大正一二）年よりは、ILO 本部勤務となつた。ジュネーブにおける鮎澤は、すぐれた語学力（英・仏・独）とアメリカで培われた学識と卓見で、先駆的国际人として活躍した。

この間、日本は満洲進出、ソーシャルダンピング（社会的投売）問題等で、世界より糾弾されるなど、暗雲も立ち込みはじめていた。ソーシャルダンピング問題について、ILO は調査団を日本に派遣した。鮎澤も調査団の一員として来日し、全国をまわり、日本の労働・社会事情を調査した。結果、日本にはソーシャルダンピングは存在しないという報告書がまとめられた。

その後、一九三五（昭和一〇）年に、ILO 東京支局

長に就任したが、すでに日本は、国際連盟のリットン調査団による満洲国問題に関する調査報告の結果として、一九三三（昭和八）年には、国際連盟を脱退して世界の孤児の道を歩み始めていた。一九三八（昭和一三）年には、日本はILOも脱退し、鮎澤の支局長としての主な仕事は、東京支局の閉鎖とその後始末という不本意なものとなった。

第二次世界大戦前のリベラルな人々にとつて、日中戦争から太平洋戦争時代は、試練の時であつた。鮎澤は、ILO東京支局長を辞めてからは、世界経済調査会の常任理事等を務めた。しかし、本意の日々ではなかつたようである。親交のあつたジャーナリスト清沢^{きよさわ}洸は、一九四四（昭和一九）年三月一二日の日記に「大東亜戦争は総べての研究—人文科学を殺した。世界機構の問題の研究すらも危険なり、赤化なり、敗戦主義なりと迫害された。鮎澤君の如きはその一人である」（清沢洸『暗黒日記』評論社、一九七一年）と記している。

鮎澤は、戦争が激化した一九四四年には、軽井沢へ疎開し、翌年には、鶴川に住んだ。鶴川移住に際しては、芝中学時代よりの友人柴田徳次郎が手をさしのべた。

戦後、柴田は公職を追われた時期、鶴川で農事に勤しんでいる。その鶴川に鮎澤を招いたことで再会し、学校

長としての職務遂行が困難な立場にあつた柴田に代わつて、鮎澤がその任を引き受けたのである。これは思想・信条ではなく、あくまで二人の友情から生まれたものと言えよう。

さて、校長となつた鮎澤に課された責務は、たやすいものではなかつた。すなわち、GHQの掲げる「民主化」に沿つた学校教育を実践し、かつ伝統ある学風を保つ必要もあつた。また、大半を焼失した校舎の再建も急務であつた。

こうしたなか、CIEの役人が訪れた際には、流ちょうな英語で応対し、相手方の通訳が不十分であれば、それを指摘したこともあつたという。こうした姿は、当時の学生や教職員にとつて、どれほど頼もしかったか知れない。

鮎澤の人柄については、後に鮎澤が教授を務めた国際基督教大学（ICU）の教え子で、文化庁次長を務めた久保庭信一が次のように語っている。

先生は非常に優秀なお方であつたことは、もとより言うまでもないことであるが、誠実かつ勤勉な方であられた。また、情に篤い人の面倒見の甚だ良い方で、頼まれれば決して拒まれることなくお引き受け



大講堂の演壇で話す鮎澤巖（昭和23年頃）

になり、紹介状書きに深更まで励まれることもしばしばであったとお聞きしている。いわゆる古武士を感じさせるような背筋の伸びた毅然とした姿勢の良さ、厳しさの中に、いつも温顔を絶やさず、それでいて常にユーモアをお忘れなく楽しいジョークをとばしていられたことを覚えている（久保庭信一「尊敬するロマンチスト―鮎澤巖先生のこと」前掲『鮎澤巖先生記念誌』）。

そして少しずつではあるが、学校生活も落ち着いてきたようである。たとえば、当時、帰省中であつた至徳専門学校生の飯塚新吾氏に友人が宛てた便り（飯塚新吾寄贈資料）には、次のように記されている。

（前略）僕としては復校を望むよ。成る程校舎はあんな焼け残りだが、講義は実に充実して来、新校長鮎澤博士の講義は名講義だ。担当は社会学だ。出来れば帰校を待つ。

また、校名変更に伴い、新たな校歌が作られた。作詞は鮎澤であった。その二番は次のような歌詞である。

開けや諸びと黎明に 至徳学園の

樹陰の静寂を破り 校庭にどよめく若人の喊声を

誠意勤労気魄見識を旨とし 正義と博愛に

使命を捧げつつ 吁^{ああ}日本の再建のため

奮ひすすむわれらの 誓は固し

そこには、変化する時代に合わせながらも、国士館の四徳目である「誠意・勤労・見識・気魄」を歌詞に刻み、伝統ある校風を守っていかうとする鮎澤の心意が感じられる。

校舎の再建にあたっては、一九四七（昭和二二）年から私立学校建物戦災復旧文部省貸付金を得て、環境整備を迅速に進めた。

また、一九四七年三月の「教育基本法」「学校教育法」に基づき、同年四月、新制の至徳中学校を設立し、さらに、翌年四月に至徳高等学校を設置した。

このように、戦後の混乱期にありながら、空白の期間もつくらず、学園を守ったのである。

かくして、一九四七年三月、至徳専門学校から最初の卒業生を送り出している。その際鮎澤は、「卒業生諸君に贈る」（六倉靖寄贈資料）と題する一文を贈っている。

（前略）かつては武を磨き文を修めて全国にその名を謳はれた「国士館」が、平和と文化と民主主義とを高調する「至徳学園」となり、新日本の建設への戦ひに於ける最前線の闘将をおくり出さうと、更生の決意に燃えるこの学園の校門から茲に卒業生として社会に出て行かれる諸君の双肩には重大な使命がかゝつてゐる。願はくは至徳学園の卒業生たることに誇りを持つと共に文化国家日本の建設への、諸君の担ふ特殊の使命に最善の努力をつけ、諸君の先輩や、後から続く後輩の同級生や、社会が諸君に対して持つ期待に副つて勇敢に元気に健闘して頂きたい。我々は諸君を信頼し前途を祝福するものである。

昭和二年二月二十一日

すなわち、卒業生が国家再建の使命を担うことを願っており、校名が変わり、時代が移っても、国家有為の人材を育成するという教育理念は変わることなく引き継いでいたのである。

そして、一九四九（昭和二四）年五月、概ね学園の経営も軌道に乗り始めたとき鮎澤は、柴田梵天理事に任を引き継いで、校長を退任している。学園最大の危機の時に現れ、それを救ったとみるや身を引いた、まさに救

世主であった。

校長を退任した鮎澤は、ユネスコ在日代表部顧問となったのを皮切りに、再び国際社会に活躍の場を求めた。なかでも、世界平和の確立を目指した世界連邦建設の運動に邁進していく。この世界連邦建設は、鮎澤にとって終生の仕事となった。一九六三（昭和三八）年、日本で開催された第一回世界連邦世界大会では、組織委員長を務めるなど、中心的存在として活躍した。

他方、国際基督教大学（ICU）教授や普連土学園理事長等を歴任し、教育の場でも任を求められた。

一九六六（昭和四一）年、鮎澤は、フランス永住のため離日する。そして、一九七二（昭和四七）年一月三〇日、フランス、ノルマンディ地方ブアシャルの病院で逝去、七八年の生涯であった。

一九八二（昭和五七）年一月三〇日、国士館では、「元至徳学園校長故鮎澤巖先生十回忌追悼法要」を、ご遺族をはじめ、学校法人役員、教職員及び知人多数を招いて盛大に執り行った。その際、長男鮎澤純氏が遺族代表の挨拶のなかで、

亡父がよく、「これもまた芝中時代の柴田徳次郎先生と同窓生の友情の結晶であり、自分がこの際でき

るだけのことをして、立派なその友情に對して、この大学に全力を尽してゆきたい」と申しておりましたが、今日、かくも盛大な大学が建設されましたことを、亡父は天上から見ても、喜んでいることと思います。（家族一同感激ひとしお：遺族代表のご挨拶）『国士館大学新聞』第二三二号、一九八二年一月二七日）

と述べられている。まさに鮎澤巖と柴田徳次郎の友情が国士館を救ったと言えよう。